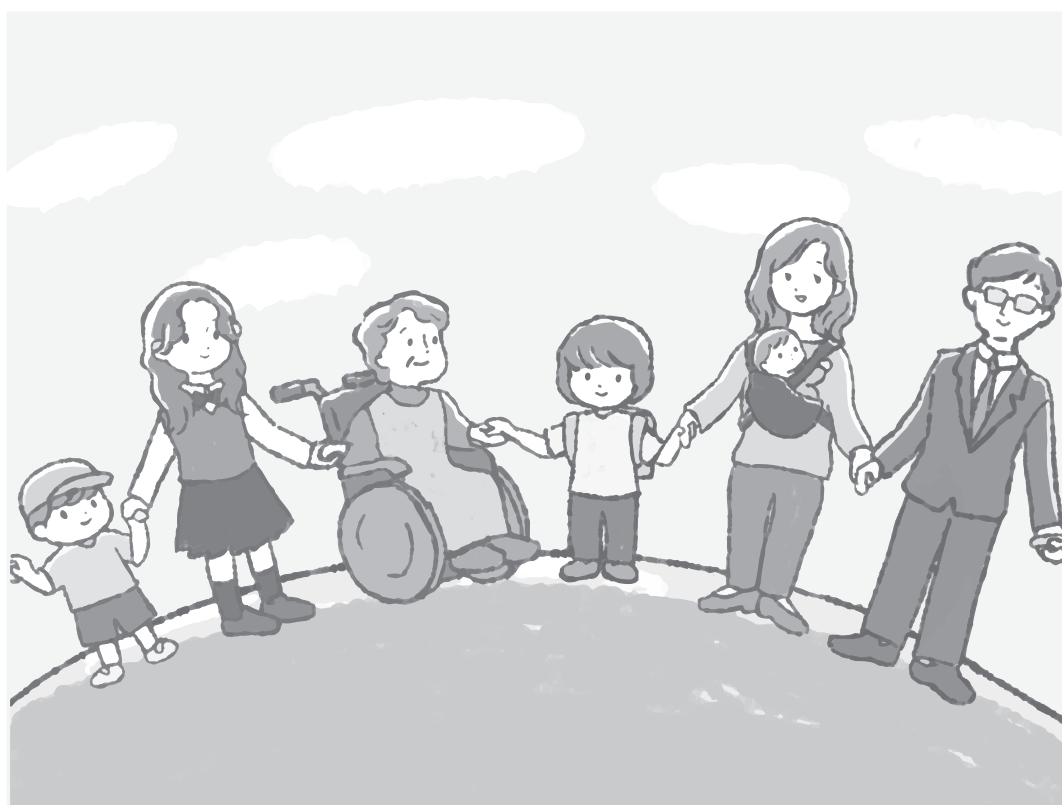


令和5年度  
児童・生徒福祉作文作品集

# 青空



社会福祉  
法人 佐野市社会福祉協議会

# 福祉作文作品集 「青空」の発刊によせて

福祉作文作品集「青空」の発刊にあたり、一言ごあいさつ申し上げます。

令和五年度児童・生徒福祉作文募集事業に、968編ものご応募をいただきまして、誠にありがとうございます。最優秀賞、優秀賞、佳作の入賞作品が選出されました。各賞を受賞された方につきましては、大変おめでとうございます。

お寄せいただいた福祉作文では、福祉的な視点から障がいについて考えを深めたり、ボランティア活動体験などを通して普段の生活で感じたこと、気づいたことについて書かれた作品など多数ご応募いただきました。どの作品も感情豊かに綴られて、人と人との心のふれあいを通じて互いに思いやり、助け合い、誰にとってもやさしい社会にしたいという思いがあふれる力作が多くみられました。

この作品集を多くの皆様にお読みいただき「だれも」が「ふつう」に「あんしん」して暮らしていけることの大切さ、そして身近な福祉に改めて関心を持っていただきこれからの互助活動に活かしていただければと切に願います。

むすびに、本事業の実施にあたりまして、多大なご協力をいただきました関係者の皆様、作品の審査にあたられました皆様、作品を応募していただいた小・中学生の皆さんに心から感謝を申し上げます。

社会福祉法人 佐野市社会福祉協議会

会長 半谷昌弘

題名

最優秀賞

みんなをつなぐボランティア

身近な福祉

私の妹

一冊の本から学んだこと

優秀賞(小学生の部)

おもいでダンス

ぼくのひいおばあちゃん

みんなにやさしい町に

福祉から教わったこと

ぼくの見えている世界

ふつうって何

十人十色

たった一度きりの人生だから

学校名

学年

氏名(敬称略)

葛生義 九年  
犬伏東小 六年  
旗川小 四年  
城北小 二年

戸と 栗くり 山やま 林はやし  
坂さか 城き 根ね  
梨り 真ま 波はる 舞ま  
花か 陽ひろ 瑠る 桜お

城北小 一年  
植野小 二年  
栃本小 二年  
犬伏東小 四年  
吉水小 四年  
あそ野義 四年  
城北小 五年  
城北小 六年

高たか 中なか 内うち 大おお 吉よし 鈴すず 浅あさ 海かい  
橋はし 村むら 田だ 矢や 永なが 木き 野の 原はら  
虹こ 應おう 圭けい 花はな 晴はれ 穂ほ 絢けん 空そら  
杜と 介すけ 祐すけ 花はな 乃の 乃の 乃の 乃の 乃の 乃の 乃の 乃の

15 14 13 12 10 9 8 7

5 4 2 1

すばらしい介護

葛生義六年

小松原

乃愛

17

優秀賞(中学生の部)

現在の社会福祉・将来の社会福祉

つながる福祉

今私が福祉のためにできること

「知る」ことから始めよう

障がい者が暮らしやすい社会に

西野中一年

あそ野義七年

佐野附中一年

城東中二年

西野中二年

齋藤

高橋

山田

中野

山本

由奈

愛来

仁唯奈

莉玖

佳穂

佳作

(題名・学校名・学年・氏名)

25

18

19

21

22

23

# 最優秀賞

(小学校一・二年生の部)

## みんなをつなぐボランティア

城北小学校 二年 林<sup>はやし</sup>舞桜<sup>まお</sup>

「今日の帰りは、じいちゃんね。」

わたしのおばあちゃんが、月に一回言うセリフです。となりですんでいるわたしのおばあちゃんは、毎日とう下校を見まもってくれています。

おばあちゃんは、みんないいんをやっていて、月に一回会いに行きます。その時間がわたしの下校の時間とかさなるので、その日はおじいちゃんが来てくれます。

おじいちゃんは、町内の子どもたちの下校を見まもるボランティアです。下校は学年によって時間がちがうので、町内のボランティアさんが交たいで見まもりをしてれています。おじいちゃんは、こまっている子や元気のない子がいると、

「どうしたの？大じょうぶ？」

と声をかけています。見まもってくれている人たちの

おかげで、わたしたちはあん心して歩いて帰ることができます。

会ぎから帰ってきたおばあちゃんに

「みんないいんって、なにをしているの？」

と聞いてみました。すると、

「地いきの人のそうだんあい手になって、地いきのふくしとつなぐボランティアをしているんだよ。」

と教えてくれました。一人ぐらしの高れいしゃが、元気にすごしているかようすを見に行つて、こまつていれることがあればお話を聞くそうです。せんもんの人にれんらくをして、来てもらうこともあると知りました。あついい日もさむい日も、おじいちゃんやおばあちゃんにはボランティアをしています。たいへんじゃないか聞いてみたら、

「ボランティアをしていると、ありがとうと言われて元気をもらおうよ。」

と言っていました。

わたしは、ボランティアをしてみたいという気もちになりました。だれかのお手伝いだいて「ありがとう」と言われたらうれしいです。元気をもらつてえ顔になります。ボランティアは、元気をあたえたり元気をもらつたりして、みんながしあわせになるんだなと

思いました。

「自分ではすぐにたすけられなくても、だれかにつたえたりすることです。たすけることもできるんだよ。」とおぼあちゃんが大切なことを教えてくれました。わたしは、こまっっている人がいたら、声をかけられる人になりたいです。小さなことから、ボランティアの第一歩をはじめてみたいと思います。

これからも、子どもや高れいしゃ、みんなが地いきのふくしとつながって、あん心でしあわせに生活できるといいなと思います。わたしは、おじいちゃんおばあちゃん、ボランティアのみなさんに、心から「いつもありがとうございます」とつたえたいです。そして、みんなにボランティアのわが広がるといいと思います。



## 最優秀賞

(小学校三・四年生の部)

### 身近な福祉

旗川小学校 四年 山根 やまね 波瑠貴 はるき

ぼくは、しょう害者福祉について考えてみました。調べてみると、しょう害者福祉とは、「しょう害のある方が自らの望む生活を営むことができるように支える」と書いてありました。言葉にすると、難しく感じました。しかし、ぼくの身近にも福祉サービスがあることに気がつきました。

ぼくは、一年生のときから週に二回、放課後デイサービスに通っています。学校が終わった後に、デイサービスの人が迎えに来ます。宿題のわからないところを教えてくれたり、手を使う作業をするときに手伝ってくれたりします。ぼくはみんなと同じことを一緒に進めていくことが難しいので、放課後デイサービスでさまざまなことを学んでいます。初めはなんで自分だけ通っているのだろうと思っていました。しかし今では、できることが少しずつ多くなって、友達も増えて

よかったと思っっています。デイサービスの先生たちは、意味を理解できるまで何度も説明してくれます。

ふり返ってみると、ぼくは、いろいろな人に手助けしてもらいながら生活していることに気づきました。自分が経験していることが福祉サービスなんだと思いました。

ぼくのお母さんは、福祉に関わる仕事をしています。福祉についていろいろ知っています。ぼくが通っているデイサービスのことも安心して通わせられるから、ありがたいと話しています。ぼくは、デイサービスに通うことがはずかしいことだと思っていました。でもお母さんは、デイサービスのような福祉サービスが使えることは、まわりの人にも知ってもらっていた方がいいのよと話していました。考え方は、人それぞれなんだと思いました。

ぼくもいろんな人たちに支えてもらいながら日々の生活を送っています。そのことがどんなに恵まれていることなのか、今まではよく分かっていたはいませんでした。それは、ぼくだけがなんでみんなが行かないデイサービスに通わなくてはいけないのだろうと思っていましたし、ぼくもみんなと同じ学童に通いたかったからです。

しかし、今はちがいます。ぼくがデイサービスに行き始めてから、思っていました。おじいちゃんとおばあちゃんが

「手先が上手に使えるようになってきたね。」  
と、ほめてくれるようになったからです。ぼくもそう言われるとうれしいです。

そこで、そういううれしさを広めたい。また、身近な福祉を知ってほしいと思いました。

福祉はたくさんの人たちの支えで成り立つものです。そして、それは身近なところにあつて、とつてもうれしいものです。だからぼくは、身近な福祉について知ってもらったり、自分でも、学んだりしていきたいです。



# 最優秀賞

(小学校五・六年生の部)

## 私の妹

大伏東小学校 六年 栗城くりき 真陽まひろ

私の妹は、自閉症で、重度の障がいをもって生まれてきました。成長がゆっくりで、会話をしたり、思うように歩いたり、走ったりすることができません。なので、保育園や幼稚園には通うことはできません。そのかわり、障がいのある人がりよう育を受けることのできる場所へ毎日通っています。

りよう育とは、障がいをもつ子供が社会的に自立することを目的として行われる医りよう育と保育のことです。妹は、一才半のころからりよう育を受けています。そのおかげで、妹はとてもゆっくりですが、日々成長し続けています。

例えば、私の名前を覚えて呼んでくれたのは四才、五才にはくつをはいて少し歩けるようになったり、スプーンを使って自分でご飯を食べることができるようになったりしました。それを見て、私は毎回「障がい

があっても、少しずつ少しずつ成長していて、とてもすごいな。」と思います。妹のこの成長はりよう育という福祉のおかげだと思っています。

しかし、福祉とは何かを詳しく知らない人が世の中にはいっぱいいると思います。そこで、身の回りの福祉について少し調べてみました。

例えば、「バリアフリー」があります。これはもともとは建築用語として、道路や建築物の入口の段差などの物理的な障壁の除去という意味で使われてきたのですが、現在では、障がいがある人や、高齢者だけでなく、あらゆる人の社会参加を困難にしているすべての分野での障壁の除去という意味で用いられています。

また、実際に障がいのある人が社会の中で直面しているバリア（障壁）には次の四つがあるそうです。

一つ目は、物理的なバリアです。これは、公共交通機関、道路、建物などにおいて、利用者に移動面で困難をもたらす物理的なバリアのことです。

二つ目は、制度的なバリアです。社会のルールや制度によって、障がいのある人が能力以前の段階で機会の均等を奪われているバリアのことです。

三つ目は、文化・情報面でのバリアです。情報の伝



え方が不十分であるために、必要な情報が平等に得られないバリアのことです。

四つ目は、意識上のバリアです。周囲からの心ない言葉、偏見や差別、無関心などの、障がいのある人を受け入れないバリアのことです。

このように、私の妹のことと、障がいのある人が直面している四つのバリアについてたくさんの人に知ってもらいたいです。

これからも、身の回りの福祉について知り、障がいのある人への理解を広めていきたいと思いました。



## 最優秀賞

(中学生の部)

### 一冊の本から学んだこと

葛生義務教育学校 九年 戸坂<sup>とさか</sup> 梨花<sup>りか</sup>

皆さんは、「音声ガイド」を知っていますか。私は、映画鑑賞が趣味なので、DVDを借りてきては、家でも観ています。その時に初めて音声ガイドという存在を知りました。気になったので、音声ガイドを付けてみると、驚いたことに人物の動きや情景など、一つ一つの情報を、全て言葉で説明しだしたのです。私はすぐに気がつきました。

(きつと音声ガイドは視覚障害者の方が利用するものだ。)

と。だから今度は、目をつぶって音声ガイドを頼りに、映画を観てみました。しかし、なかなか説明された情報をうまく想像することができなくて、途中で断念してしまいました。私は、目が見えない生活は怖くないのかと疑問に思いました。なぜなら、何も状態が分からず、いつもより耳に入ってくる音が大きく聞こえた

からです。

その疑問を解決してくれたのは、小学五年生の時に出会った「見えなくてもだいじょうぶ？」という本でした。この本は、目が不自由なお兄さんが迷子の女の子を助けてあげるお話です。視覚障害者の方が感じている世界が表現された本ですが、その表現の中でも、印象に残った言葉がありました。

「だれでもぜんぶ見えているわけじゃないんだよ。」という言葉です。私は、この言葉のおかげで、視覚障害者の方々に対する見方が変わったように思います。確かにお兄さんは、目を使わず、聴覚や嗅覚で周囲を認識することができます。しかし私には、聴覚と嗅覚を使って認識することは容易なことではありません。私とお兄さんの見る＝感じる世界は、少し違いがあるかもしれません。しかし、どちらも素敵な世界です。もし、この言葉に出会わなかったら、今でも目が見えない生活は怖くてかわいそうと思っていたことでしょう。しかし、そうではないことをお兄さんが教えてくれました。目ではなく他の所で補えば、見る事ができるんだよと。

それから生活していく中で、少しずつ意識することが増えました。例えば歩いていくときに、なるべく点

字ブロックの上を避けるようにしたり、点字辞書に触れてみたりなど、些細なことですが、意識し続けることで、誰かを笑顔にすることができると思っています。一人一人の些細な思いやりで誰かを救い、助け合える社会になっていったらいいなと思います。それが、これから目指すべき本当の福祉ではないでしょうか。そして、誰かにとつての光になれば嬉しいのです。



## 優 秀 賞 (小学生の部)

### おもいででのダンス

城北小学校 一年 高橋<sup>たかはし</sup> 虹社<sup>こは</sup>

わたしががんばっていることのひとつにダンスがあります。ひとりでおどることもあります。みんなのちからをあわせてひとつのステージをつくりたいです。そのメンバーのなかに、しょうがいがあるひとがいます。そのひとは、ダウンしそうです。うごきやかいわがゆつくりで、わたしたちとはべつべつにれんしゅうすることがおおいです。

はじめは、「しょうがいがあるひとにもダンスをするんだな。」とおもいました。しょうじきに言えば、どうはなしかければいいのかわかりませんでした。おねえちゃんがはなしをしているのを見て、わたしもはなしかけようとおもいました。すると、いままできづかなかったことがみえてきました。「しょうがい」ということばがきになっていたけれど、そのこは、みんなとおなじようになんでもできるし、とてもげんきにあいさつやダンスをしています。わたしは、しょうがい

をのりこえるためにいっしょうけんめいどりよくし、えがおでれんしゅうするすがたにころがうごかされました。そのすがたから、さいしょからむりだときめつけてあきらめるのではなく、げんかいをこえてがんばることのたいせつさをまなびました。そしてゆうきをもらいました。

ダンスをしているなかで、ころがつながる時がありました。しょうがいではなくても、ひとりひとりがいます。しかし、おなじおんがくでダンスをしたり、おなじふりつけをれんしゅうしたりすることで、わたしたちはひとつになれるとかんじます。このチームワークをたいせつにしようとおもいました。

ちいきでひらかれている、ダンスのはつぴょうかいにさんかしました。みんなとてもいっしょうけんめいおどっていて、きらきらしていました。かぞくもいっしょにたのしもうおどっていました。このけいけんをとおして、しょうがいがあるひとのこうりゆうをたいせつにしたいとおもいました。しょうがいがあっても、わたしとおなじようにゆめをもっていたり、リズムにのることをたのしんでいたりしています。おもいこみやさべつをせず、すこしのゆうきをだせば、いっしょにせいちょうし、おおきなステージをつくるこ

とができるのだとおもいます。

いまでは、ダンスクラブはわたしにとってところがつながつたなかまとのたいせつなばしょとなりました。しょうがいがあるひとのこうりゆうをとおして、じぶんたちがうひとをうけいれることのたいせつさをまなびました。そして、にがてなことはたすけあつたり、ささえあつたりすることのすばらしさをかんじています。しょうがいがあるメンバーとのあいは、わたしのかんがえをおおきくかえてくれました。これからも、このチームでダンスをがんばりたいです。

## ぼくのひいおばあちゃん

植野小学校 二年

中村 なかもら 應介 おうすけ

ぼくには、八十八さいのひいおばあちゃんがいます。ときどき、ぼくのいえにあそびにきたり、ぼくがひいおばあちゃんのいえにあそびに行ったりしています。でも、ひいおばあちゃんと話をするのはあまりすきではありません。ぼくが言ったことをなんども聞きかえしてくるからです。なんども同じ話をしていると、だんだんめんどうくさくなってきます。そうすると、ひ

いおばあちゃんも、「聞こえないや。」と言って話がおしまいになってしまいます。

「ひいおばあちゃんは話を聞いていないよね。」

そうおかあさんに言うと、おかあさんは耳せんをさがしてきて、ぼくにわたしました。

「これをしておかあさんの話を聞いてみて。」

耳せんをすると、耳に水がつまったときみたいに、音が聞こえにくくなりました。おかあさんの話も聞こえるところと聞こえないところがあります。ずっとそうしていると、言っていることがわからなくて、いらしてきました。

「もつとゆつくり、大きなこえで言つてよ。」

と、おこりながら言うと、

「ひいおばあちゃんはこんなふうに聞こえているんだよ。」

おかあさんがあかるく言いました。

「年をとるとだんだん耳が聞こえにくくなってしまふんだよ。でもひいおばあちゃんはおうすけのことが大すきだから、本とうはたくさんお話したいんだよ。」

ぼくはとてもおどろいて、ひいおばあちゃんにわるいことをしてしまったとはんせいしました。ひいおばあちゃんは、ぼくの話聞いていないのではなく、ぼく

が早口で小さなこえで話すから、聞こえなかったのだと気づきました。大すきな人と話したいのに、なにを言っているか聞こえなくて、あい手がめんどうくさそうにしていたら、とてもかなしい気もちになります。

ほかにも黄色のセロファンを目にあてて、まわりを見てみる、というのもやってみました。ひいおばあちゃん、白内しようという目のびよう気の手じゅつをしています。白内しようになると、まわりのけ色が黄色っぽく見えてしまうそうです。年をとると、けがのように目に見えないけれど、体の中にもわるくなってしまうところができて、こまってしまうことがあるのだとりました。

それから、ひいおばあちゃんと話をするときは、ゆつくり大きなこえで話すようにしています。ひざをまげるのがいたいそうなので、ぼくがくつをならべてあげています。

「ぼくにお手つだいでできることはある。」  
と聞くと、ひいおばあちゃんはともうれしそうです。ひいおばあちゃんがうれしそうにしていると、ぼくもなんだかうれしくなります。これからも、ぼくにできるお手つだいをたくさん見つけていきたいです。

## みんなにやさしい町に

栃本小学校 二年 内田 圭祐

ぼくは、七十七さいになるおばあちゃんと、いっしょにくらしています。ぼくのいえは、お父さんとお母さんがしごとをしているので、せんたくやしよくじのじゅんびを、おばあちゃんがしてくれます。ぼくはおばあちゃんといっしょに、よくスーパーに買い物に行きます。おばあちゃんは、いつもたくさんざいりようを買います。おばあちゃんが、一人でたくさんのもつをもつて歩くのは、とても大へんです。にもつは、おもくてつかれてしまうし、バランスをくずしてころんでしまうかもしれません。だから、ぼくは、いつもカートをおしたり、買ったものをはこんだりするようになっています。買い物ものに行くと、おばあちゃんと同じように、たくさんのお年よりが買い物ものにきていました。ぼくは、お年よりがあん全で気もちよく買えるものができるお店がたくさんあるといいなと思いました。「きよう、ばあちゃんと買い物ものに行つたよ。お年よりも、けつこうきていて、大へんそうだったよ。」と夕ごはんをたべながら話をするよ。

「なぜ、あのお店にお年よりがたくさんきていると思う。」

と、お父さんがぼくに聞いてきました。ぼくは、分からずこまっついていると、

「だんさがなくて入りやすいんだよ。」

と教えてくれました。ぼくは、今までだんさのことなんて気にしていなかったので、すこしおどろきました。

ある日、お父さんと出かけてるときに、

「ほら、あそこを見てごらん。」

とお父さんがゆびをさしました。見てみると、あるおうちのげんかんがかいだんになっていて、そのよこにゆるやかなさか道がありました。さか道には、手すりもついています。

「こういうのがあると、あんしんだね。」

とぼくはお父さんに言いました。すると、お父さんは「そうだね。かいだんだと、つまずいてころんでしまふかもしれないけれど、スロープがあるからあんしんだね。」

と言いました。ぼくは、スロープということばを、はじめて聞きました。スロープとは、ゆるいさか道にすることでだんさをなくし、どんな人でもあん全に通ることができるようになっているものであると知りまし

た。そして、スロープのような、人にやさしいものがふえていくと、バリアフリーにつながっていくことも分かりました。ぼくは、バリアフリーということばに出会ってから、手すりやスロープなどを気にして見るようになりました。すると、まだまだみんなにやさしい、かんぺきなバリアフリーの町とは言えないと思うようになりました。ぼくのおばあちゃんやお年よりがあんしんしてくらせる、もつともつとやさしい町になっていってほしいです。

## 福祉から教わったこと

犬伏東小学校 四年 おおや 大矢 はな 花

みなさんは、「福祉」という言葉を聞いて、どんなことを思いうかべるでしょうか。私は、福祉という言葉聞いたことはありますが、くわしいことは何も知りませんでした。そこでこの作文を書くにあたり、「福祉」について調べることにしました。ちょうど私の親せきのおじさんが高齢者施設で介護福祉士をしていたので、話を聞かせていただくことができました。おじさんの話によると、「福祉」とは「全ての人々

が、幸せにくらせる社会を目指すこと」だそうです。具体的には、高齢者をはじめ、子供や障がいのある人、生活困窮者などへの支援を行うことだそうです。

高齢者の介護といえば、私には体が不自由な祖父がいます。家族の助けがなければトイレやお風呂に入ることが難しく、その介護の様子を見たことがあったので、体力的にも精神的にも大変な仕事だろうと思っていました。そこで、具体的にどんな仕事内容なのかおじさんにたずねたところ、実際に施設を見学させてもらえることになりました。

見学をした場所は、佐野市内の介護老人施設です。そこでは、スタッフの方々が利用者さんにご飯を食べさせたり、ベッドから車椅子に移動させたりしている様子を見ることができました。私は、力が入らない利用者さんたちを必死に支えているスタッフの方々にとても感心しました。どうしてそこまでがんばることができるのか聞くと、「利用者さんに笑顔でいてもらいたい」という思いで働いているからだを教えていただきました。

次に、車椅子を使用した体験をさせてもらいました。まず、私が車椅子に乗り、自分で移動したり、そのまま福祉車両に乗せてもらったりました。車椅子を動

かすことは難しく、力がいることで、利用者さんの大変な気持ちをもつて知ることができました。その後、車椅子に乗った人を、私が後ろから押してあげることで、スタッフの方々の大変さも実感しました。

今回、これらの「福祉」に関する体験を通して、自立ができない利用者さんは、日々大変な思いで生きていることを知りました。そして、そういった方のため、一生懸命頑張っている方がいることも知ることができました。

普段から当たり前のように生活できる私は、こうした状況を知りませんでした。だから、福祉というものを考える機会が無かったのだと思います。今回の体験を通して、周りには自立することが難しい方がいて、福祉はそういった方にとって大切なことだということをよく理解することができました。

これからの生活において、当たり前に生活できることに感謝の気持ちをもち、助けが必要な人には自然と手を差し伸べられる、そんな人になっていきたいと思っています。